

第30回

第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

日本人の美意識

今回学ぶこと

日本において美意識と倫理とは深く結びついている。この世のものはすべて変化し消滅していくものだとする仏教の無常観も、日本人は、はかないからこそ、この世は美しいのだという積極的な世界観として受けとめた。そのように、否定的なものを肯定的に受け止めようとするところから、「あはれ」「幽玄」「わび」「さび」といった日本人の美意識が生まれた。また「いさぎよさ」に美しさを求めた武士道についても考える。



講師

田中久文

■ 無常の美と「あはれ」 ■

吉田兼好の『徒然草』には、「世はさだめなきこそいみじけれ」とある。この世は無常であるからこそ、一瞬一瞬が貴重であり、味わい深いのだというのである。こうした考え方は、変化するもののうちに美を見いだそうとする発想となって、日本のさまざまな芸術や芸能の底を流れる美意識を形成した。

その代表的なものが「あはれ」という美意識である。「あはれ」とは、自然や人間の無常を知り、思わずでる溜息に由来するといわれているが、そこにこそまた深い慰めがあるのだとされた。

江戸時代の国学者である本居宣長は、『源氏物語』の本質は「もののあはれ」にあるとし、それを最も深く知った人間こそが、倫理的にも最も優れた人間であるとして、そこに日本人の生き方の原点を見いだそうとした。

■ 「幽玄」と「わび」「さび」 ■

はかないもののなかに美を見いだそうとする考え方は、中世になると、自然の表面ではなく、その背後の奥深いところに美を求めようとする美意識を生みだした。それが、中世の和歌や能楽などにみられる「幽玄」という美意識である。「幽玄」は、満開の桜や華やかな紅葉がむしろ雲や雨にさえぎられ、それらを直接見るのではなく想像している方が、より美しさを味わうことができるのだとする美意識である。藤原定家の歌「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮れ」は、そうした美意識を最もよく表

現したものとされている。

また、簡素な自然の姿や年老いた人間など、普通には消極的なイメージをもちがちな「わびしいもの」「さびしいもの」に対して、逆に味わい深い美しさを見いだそうとする美意識も生まれた。千利休せんりきゅうの茶の湯で説く「わび」や芭蕉ばしゅうの説く「さび」などがそれである。

■ ■ 武士の生き方 ■ ■

武士というものは、戦乱のなかで常に命の危険にさらされていたため、日ごろから死の覚悟が必要とされ、自分の命に執着しない「いさぎよさ」が求められた。そこには心の清らかさを尊重する「清き明き心」の伝統や、無常なものに美しさを感じる美意識の伝統が生きているとあってよい。

また、武士には自分の使える主君の前で恥ずかしい戦いをしたくないという「恥」や「名誉」を重んじる考え方もあった。

ただし、他方で武士の間には、「道理」という公平や正義の観念も芽生えていった。中国から伝わった法律である「律令りつりょう」に対して、鎌倉幕府の作った「貞永式目じょうえいしきもく」(「御成敗式目ごせいばいしきもく」)は、そうした「道理」に基づいた日本独自の法律であった。

◆ コラム ◆

日本人の美意識の最も重要な特徴は、人々が否定しがちな、「はかないもの」「わびしいもの」「さびしいもの」といったもののうちに、逆に美しさを見いだしていこうというところにあるのではないのでしょうか。それは、弱さや貧しさや孤独といったネガティブなものを積極的に受け入れ、それらを肯定的にとらえ直そうとする私たちの先達の知恵だったといえるでしょう。こうした考え方は、現代の私たちにも勇気を与えてくれるのではないのでしょうか。